創業 1924 年　医療機器総合メーカー
感染対策機器
自動洗浄・除染・乾燥装置、滅菌コンテナー etc.
株式会社エムエス
本社：東京都文京区本郷 3-26-12　TEL：03-3814-1026
営業所：大阪・福岡　サービスセンター：盛岡・仙台・名古屋・岡山

日本医科器械新聞
発行所　株式会社日本医科器械新聞社　〒173-0033東京都板橋区大山西町54-12-404　電話（5926）4214　FAX（5926）4215
（1948年１月１日創刊・毎月１，11，21日発行）　購読料１年分　7,000円　E-mail：ikakikaisinbun@carrot.ocn.ne.jp

https://www.nikkamicron.co.jp
無菌技術 60 年の専門メーカー
クリーンルーム / 安全キャビネット
アイソレーター / オゾン水生成装置
日科ミクロン株式会社
埼玉県三郷市早稲田 3-16-5　TEL 048-950-2311　FAX 048-950-2323

サクラ精機の新たな拠点――

「長崎研究開発センター」を開所

長野本社と連携、製品の設計・開発担う

感染制御分野及び病理・細胞診・免疫診断分野を中心にヘルスケア事業のグローバルニッチカンパニーのサクラ精機株式会社（代表取締役会長・松本謙一氏、本社＝東京、長野）では、長野本社と連携を図り新たな滅菌システムの設計開発へ、より力を入れ製品開発を手掛けるべく「長崎研究開発センター」を出島交流会館（長崎市出島二―十一）に開設し、十月三日午前、ニュー長崎ホテルにおいて大石賢吾長崎県知事、田上富久長崎市長、河野茂国立大学法人長崎大学学長をメインゲストに、また、福岡、長崎県下の医療機器販売業者を迎えてセンターの開所式を盛大に催した。

十一時十五分よりホテル三階の丹頂の間で開始された開所式は、来賓一同が着席したところで、芥川祐輔福岡営業所所長の司会進行で開会。

開式にあたり松本会長は「サクラ精機の歴史は遡ること四二〇年前の慶長年間に泉州堺で薬種問屋として生業を始めて以来、営々と江戸時代その生業を続け、慶長年間から数え四代目で医療器械と薬種に分け、サクラは医療器械を主にしてきたことで今に至っています。

今、グローバルといわれる時代にあって、私共のキーワードとすればグローバルニッチ・すき間という立場で二つのカテゴリーで展開してきました。一つは感染制御、もう一つはがんの診断機器を手掛けており、グローバルニッチを展開するには、日本の国民医療費が三・五兆円喃々とする中で、医療機器はそのうち三兆円から四兆円くらいというようなことで、世界の健康シェアからすると、日本は伸びが大きいため、どんどん世界に打って出ていける。一方、中国では、中国製造二〇二五という習近平国家主席の、メイドイン・チャイナでないと病院に納入できない。という医療機器への対応が求められている。

アフリカでは現在の人口は十四億人くらいで中国と比肩できるが中国は少子高齢化の影響で、これから人口は減っていき、アフリカは増えていく。二〇五〇年くらいには二十五億人くらいになるだろうといわれている。ただ、昨今の激動する世界情勢からみると、グローバルな拠点に頼っていくと何が起きるかわからない。ということから、やはりお膝元の日本における拠点を増強していかないといけない。ここ長崎は新たな人材育成の源であり人材を生みだす場所。

しかし、日本はご承知の通り、人口減少社会ということで、とにかく人材を育成しなければいけないという問題に直面しています。人材育成というのは、最大の課題である。そのような中で、長崎県はじめ、いろいろな方々から熱心に企業誘致というお誘いを受けまして、私も、正にこの地こそ、我々が求める人材育成のまたその源の人材を生み出される場所だな。ということを痛感いたしました。

ここ長崎というと原爆というような、つらい思い、確かに大変なことだったと思いますが、未来を考えますと総意で開発、製造等を延ばしていけば中国、東南アジアにも十分対峙できると思います。もちろんこれからも大いに海外、とりわけ米国あるいは西ヨーロッパは発展していくと思います。

私事で恐縮ですが、私、八十六歳になります。八十六歳でよく国内はもとより、世界中飛び回り、会社の会長というより怪しげなコメントを書く怪しい鳥の「怪鳥」ではないかとよく言われていますが、今や翼をもがれた鳥ではないかと。そんなことで、特に国内に拠点を築いていきたいというのが偽ざる心境です。本日は長崎県の重鎮、先生方がご出席いただき大変光栄でこれからも末永くご指導ご鞭撻をお願い申し上げます」と挨拶した。

大石知事、田上市長も出席祝辞となるがここで本日出席の来賓が紹介され、来賓を代表して大石賢吾県知事から「サクラ精機様は長い歴史を持つ会社として、国内のトップシェアを誇る滅菌メーカーとして、国内外の医療機関において利用され、医療機器産業界の発展に多大なる貢献をしていると承知しております。このような優良企業が長崎市に来ていただけることは大変喜ばしいことと思います。特に若い方々がこれから長崎市でハイレベルなことをしていくことまさに喜ばしく本当に感謝しております。本日は長崎大学学長も臨席されておりますが、長崎市は国際学士都市になって世界にライフプレゼンスをさらに大きくしていくことも我々期待しているところであり、サクラ精機様がこの場に来ていただけたこと本当に心強く思っています。

県といたしましても長崎研究開発センターが順調に進むように、人材の育成、人材の発効また地元の教育機関を含めて確りとスムーズにやっていけるように県庁一丸となってバックアップ体制をとっていきたい。今後、人材育成、また県外内から来ていただける方々に働く場所として大いにお力添えいただきたい。」と。

また、田上富久市長からも「順調にサクラ精機長崎研究開発センターの開所をみたこと誠に嬉しく思っています。先日、東京・長崎情報交換会にお集まりいただいた折に松本会長、東社長はじめ皆様にもお越しいただき、長崎の現状等についても時間を割いていただきました。

頂いた資料で中国・中山艦の消毒器が発見の記事を読ませていただきましたが、この「中山艦」は長崎の三菱造船所が中国からの発注を受けて建造したもので、そういう意味でも、そのころからサクラ精機様が長崎とゆかりがあったということかと思いました。

長崎の産業構造、産業振興を考えた時、これまでは造船、水産、観光という長年続いてきた産業の柱があったが、それに加えてライフサイエンス分野というのは、これから非常に大きな分野であるということ、これが加わることは長崎全体の発展に大いに力となると思います。今後、長崎県、振興財団、市が一丸となって精一杯努力してまいります。今日がまた一つの一里塚となってサクラ精機様がますますご発展に繋がること、長崎市、長崎県とのゆかりが未来に繋がり社会に貢献できることを願っています。」と祝辞が述べられた。

ここで東竜一郎社長から、「この開所式ですが、思い起こしますと、ほぼ四年越しの開所となりました。当時東京にあります財団さんの方からお声をかけていただき、当初は話半分と言うようなことでお話をお伺いしていましたところ、聞くにつれて私どもが求めていた、文化であり、事業の特色であり、そう言ったことに興味をそそられ、いろいろ勉強させて頂きました。コロナが猛威を振るいまして、なかなかお互いの話も出来ないこともありましたが、ようやく本日開所の日を迎えることができました。これも皆様の温かいご協力と感謝する次第です。また私自身もサクラ精機としてこの研究開発センターを、この地に設けられたことを本当に感無量でございます。」と前置きし、サクラ精機とは何か、これから長崎でどういうことを行っていくかについて述べた。

同氏は、まずサクラ精機の歴史、業祖である「鰯屋」が泉州堺の薬種商を始祖にその由来、寛永年間に江戸・日本橋で薬種商のち医療機器部門の独立（創業）から今日まで一五一年が経過し、医療機器業界最古の企業として営々と継いでいることを述べ、

▽新たな価値の創造を通じ、世界規模で医療の質の向上に貢献する。

▽医療産業界の先駆者そしてリーダーとして産業振興及び発展に寄与する。

▽社会貢献を通じ、健康で豊かな社会を追求し、社員及び家族の自己実現を成し遂げる。

の企業理念の下に、日本に医学の発展をもたらしたこの長崎で今後お世話になります。と結んだ。

開所式の締めくくりは宮下芳文常務取締役の閉式の辞でお開きとなった。

「長崎研究開発センター」の所在地は、長崎市出島二―十一・出島交流会館10階、スタッフは当初四名でスタートし、長野本社とリモートで結び研究・開発を進める。

サクラ精機株式会社
長崎研究開発センター開所式
サクラ精機
サクラ精機株式会社　立地協定調印式

【写真＝切り込み左より東社長、大石知事、田上市長、松本会長。知事、市長からの記念品とともに現地スタッフ。下左は2021・10月25日に長崎県庁で行われた立地協定調印式と開所したセンター内部。式典参加関係者一同の記念撮影】

※編集部より紙面の都合により「正視斜視」はお休みします。